回避的な自己愛傾向の生徒との面接事例
——教育現場における支持的アプローチを中心として——

高　橋　美知子*・伊　藤　義　美**

A Case Study of Narcissistic Tendencious Student with Avoidance:
From a viewpoint of encouraging support in educational counseling

Michiko TAKAHASHI*・Yoshimi ITO**

Abstract

This paper reports the psychotherapy process of a student with school refusal tendency in educational counseling. Educational support and psychotherapeutic support is required for educational counseling but educational counseling won't be able to treat the client.

The purpose of the paper is to clarify the role of psychotherapeutic interviews in educational counseling. And it is to investigate the significance of introducing "the encouraging support" in the field of educational counseling, and to examine recognition from the viewpoint of support in the case. There is some agreement and disagreement about educational support and psychotherapeutic support in educational counseling, and this support is expected for many things. The role of psychotherapeutic interviews tends to be unclear there. Therefore, it was supported to stabilize of the clients' mental health, and it was introduced in the encouraging support in the psychotherapeutic interviews. One client with school refusal was encouraged to go to school by proceeding with a therapist, some teachers and his family. He attended school after a while, and he could graduate school. It was carried out consultation of educational support and psychotherapuetic interview in educational counseling well. The role of psychotherapuetic inter-

*　名古屋大学大学院環境学研究科（博士課程後期課程）
Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University (Doctoral Course)
**　名古屋大学大学院環境学研究科
Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

view became clear and understood by investigating about the case.

Key words：心理面接(psychotherapuetic interview)，教育相談(educational counseling)，
支持的アプローチ（the encouraging support）

Ⅰ．はじめに

学校での教育相談活動に心理療法を取り入れ，面接を行うにはある種の難しさがある。それは教育相談は，治療ではなく相談活動と捉えられているからである。それに，一般的に教育センターといわれる公立機関での教育相談も「子どもの教育上の問題に対する心理的援助を中核とする」と考えられている（馬殿，1998)。このように教育相談は，教育的援助や心理的援助という多面的な援助が期待される中で，面接をどのように位置づけ，また，心理療法として継続していくかという困難さが伴う。そのうえ，3年という修業年限内で終結を迎えるよう努めなければならないことがある。だが一方，教育相談の場として恵まれた環境と資源を持っている。それは，親や生徒と関わりを持ちやすいということである。問題を抱えた生徒や親に，学校から面接を求めたとき，多くの場合快く応じてもらうことができる。それにより面接が長く継続した場合もある。さらに，生徒が登校している以上，どこででもコミュニケーションが取れる。実際に廊下であったときや，放課後の掃除のときに話をすることができる。また，人的資源においても豊富であり，他の教師や生徒との関わりの中で，自信を失い無気力になりかけていた生徒が，再び自信を取り戻すことなどは，多く見られる光景である(渡辺，1985)。このように学校は恵まれた環境と困難さが同居しているが，どのような場合でも，面接は来談者の心に害を与えないような心理療法に努めることが重要である。そこで，筆者は，教育現場のセラピスト（以下，Th と記す）として支持的なアプローチを，心理療法に取り入れ，「進級・卒業」という目標に向かわせている。だが，ときには目標を達成しようと焦りや無力感に陥ることがあるために，他の教師や専門機関と連携し，役割分担を明らかにしながら，共同して相談活動を進めている。そして，この「進級・卒業」は，治療終結ではなく，あくまで治療の第一段階と捉えている。

この論文では，他者とのかかわりが持てなかった不登校生徒の事例を通して，親・教師・専門医との連携で支持的アプローチを行ったことが，どのように有効であったかを考察したい。

Ⅱ．事　　例

1．事例の概要

〔事例〕　A君（以下，Cl と記す)，16歳，高校1年生，男子

〔家族構成と生活史〕

（予備面接で母親より聴取）本人，祖父母，父（単身赴任），母（主婦），弟（小学生）の６人家族。

母親は，明るく優しい雰囲気の人である。母によればClは幼い頃から聞き分けのよい子で自己主張などしたことがないということであった。長男であるが10歳になるまで一人っ子という状況であったので，家族のものから大切にされて成長した。特に祖母は異常なほど甘やかし，そばに付きっきりで，世話をしたという。このように甘やかされて育ったため，自分で問題に対処できず，いつも母親が処理していた。このClは，高校１年生の後期から他人と関わりが持てなくて，不登校傾向を示していたが，２年生の後期より全く登校できなくなった。その理由は，友人ができないので，孤立したように感じ，つらくて仕方がないということであった。今まで，登校していたのは，母親が毎日送り出していたので，何も考えないように努力し続けていたからであった。

２．予備面接（Ｘ年２月～３月）

母親から，１年生の後期に入り不登校傾向を示しているので，面接をしてほしいと依頼があった。始めに，母親と面接をしたところ，Clは学校に行きたくないときには，朝起こしてもぐずぐず言って起きないことがあり，母親は何かと理由をつけて欠席連絡をしているという。その不登校の理由については，Clの口からはっきり述べられておらず，母親は「たぶん友達ができないから寂しいのではないかと思います」と言っていた。家では，幼稚園の弟と漫画をみたり喧嘩をしたりして，行動は幼いという。また，何を聞いてもはっきり答えないので，母親はClのようすを見て，その考えを推量し，答えを提示しているらしい。

Clとの予備面接に入ったが，Clは自分の考えを語らせようとするととても時間がかかった。急いで答えさせようとしたり，無理強いするとパニックになり，話せなくなるところがあった。そのために，面接のはじめは世間話から入り，しばらくゆったりとした雰囲気にしてからClの言いたいことが出てくるまでじっと待つようにしたところ，少しずつ話せるようになった。その中で，「人に話しかけていくことができないから友達ができない。いつも一人で寂しくてつらい」ということと，「毎日習いものをやっており，忙しいから疲れている」ということを，１時間以上かけてやっとの思いで語った。その後，２週に一回のペースで面接を行っていくことにした。

〔Thの感じたこと〕

母親は明るく穏やかであるが，情緒的な交流を排除しているような人であった。それゆえに，子どもの情緒を共有できずに養育にあたってきたのか，Clは自分で不安や感情を鎮めるという自己鎮静能力（White & Weiner, 1986 ; Stern, 1989）に欠けている。これについてKohut(1978)も，親の共感の不十分さは，子どもの不安や感情を鎮めるという心的構造の形成を妨げることになると述べている。そのために，Clはいつも不安や自信のなさを訴えるの

である。それは，自己評価が低く自分に自信が持てないのであり，他者と関わることに不安を感じているからであろう。このClの情緒に対して共感的応答性を再確立させるように，母親・専門医・教師が連携して心理的援助をすることが重要であると考えた。

3．面接経過

面接は2学年にわたるので，3期に分けて述べる。Clとの面接を中心とし，親・教師・専門医との連携や連絡についても随時触れながら報告する。

(1) 第1期（X年4月～9月初め）

Clが，進級して新しいクラスに馴染めないために，人との関わりが持てず，不登校を表面化させるまでの時期（2年生前期）

Clは，進級して新しいクラスに馴染めず不安を感じている。それは新学期早々に修学旅行があるために，誰とどのように行動していいのか全く見当がつかないのである。面接で修学旅行について話し合いがあったはずだがどうだったと聞いたときも，「あったかも知れないけど，わからない」と言った。そのほかの内容を聞いても「知らない，わからない」としか言わず，全く他人事のようである。これは，「行くことよりも，向こうでだめになるかも知れないと思い不安である」と言っているように，修学旅行に行くことに強い不安を持っているためと思われる。この面接の時は何を聴いてもわからないとしか答えず1時間が過ぎていった。次の約束をして帰るように促したところ，Clは何か言いたそうにしていた。そして，「自分のなかにもう一人の自分がいて，いつも否定的に見ている」と言った。詳しく話すように促すと，「例えば，テレビを見て楽しんでいる自分をみて，それが本当に楽しいのかという否定的な自分がいる。その反対に，それを肯定する自分もいる」と言った。「だから，何が楽しいのか，よくわからなくなっている」とも言った。Clは，不安傾向が増大しているのか，自己がスプリットしているような感じがしたので〈あまり自分の中に入り込み考えすぎないようにしましょう〉と軽く伝えた。

その後の面接で，最近は考え事はしないのかと聞いてみた。すると「いろいろ考えていると寝られない。昨日は3時に寝た」という。眠くないのかというと，「全く眠くない。授業中も特に眠くない，明日起きられないと困るからと思い寝るだけ」と言った。何を考えているのかと聞いたら「自分がこの世に生まれた意義を見つけたい」ということである。Clは，怒りや楽しさを感じないと言っているが，よく聴いてみると，感じないようにしているためではないかと思われる。それは，他者に対して何かを言う前に，「これを言ったら人はどう思うか」と考えたり，「怒り」を感じる前に「なぜそうしなければならないのか」と考えるという。Clは自己表明することを強く抑制しようとしており，Thは，Clの態度に強い不全感を感じる面接であった。

6月の面接で，修学旅行についてどうだったかと聞いたら，「まあそこそこだった」という

返事だったので，〈それでは理解ができないので自分の言葉で話して〉と伝えたところ，もじもじと体を動かし，ゆっくり時間をかけてから「楽しかった」と言った。友人はできたのかという問いに，B君と旅行中はよく話をしたが，今は全く会話がないという。それは，自分から話しかけていけないし，席も少し離れているため，B君も話しかけてくれないそうである。それゆえに前のように誰とも話さないということである。これらをゆっくりと時間をかけて話した後，内面の自分が出て，理屈を言うようになった。それは今まで見せていたClとは大きく異なり，大人っぽく理論的な話しかたをした。だが，目の前に表れている自分を認めようとはせず，嫌いだという。「自分は幼く単純なほうが好きだから人には気づかれたくない」そうである。そして，この「隠れている自分」を人に知られたくないので，人の目をいつも気にしていると言った。このようなClに，どんなときの自分も認めてほしい，Thは，とても良いと思っていることを伝えた。

6月の終わり頃，水泳の授業に出ないことで何か言われたらしく，情緒不安定となり2～3日欠席した。その後の面接では，「家でも怒れて，何かぶつぶつ言っていた」と言った。以前に，感情がわからないといったClだが，実際は怒りを表出できるので，むしろ良好であることを伝えた。しかし，Clは自分の怒りを表すことには，臆病になっているらしく，しきりに落ち着かないと言った。また，「今は，全くやる気が出ないから定期考査も受けたくない」と訴えるので，〈無理せずにできたらいいね〉と軽く促しておいた。

このようなことがあり，情緒不安定になったClについて，担任に説明するために，母親が来校した。そこで，母親にClの考えていることについて聞いてみたところ，おおよそのことは知っていたが，何を聞いてもすぐに返事をしないので，いつも予想して答えを提示していたそうである。それゆえに，Clは何も言う必要がなかったのである。このような環境で成長してきたが，Clの心の中では「今まで家族にすがって生きてこられたが，自分一人で社会に出て生活できるだろうか」という不安感情が芽生え始めていた。

夏休み前の面接では，Clは学校に全く来たくないことを強く訴えていた。親が登校するように促すので何となく来ているだけで，授業中には自分の考えの中に閉じこもっているそうである。それについて聞いたところ，「ここにいる自分は本当の自分であり，家にいる自分は表面的な自分であると思う」と言った。〈何故そんな風に思うの〉と聞いたところ，「良くわからない，そうでもあり，そうでもないかも知れない」と明確には答らえれないようで，自分自身のことが曖昧であり，混沌としている。そのうえ，最近は自分の考えに入り込むことが多く，生活の8割は占めているという。Clは，自分の中にある本当の自己を表出することに恐れを感じている。それは，いつも何かするときには周囲のものにあわせてきたと言っているように「自己の表出」も他者にあわせてきたのであった。

このような自己愛傾向者の「偽りの自己＝ペルソナ」は，早期幼児期に子どもの自然な自己表出と自律性を妨げる養育者によって形成された可能性がある（Winnicott, 1980)。これ

についてHudson(1978)は早期からペルソナにエネルギーを注ぐようになると，内的には空虚になり，自己の本質が疎外され，生命感なくアイデンティティ感覚まで感じられなくなると説いているが，まさに，Clはこれに近い状態といえるのである。

9月始めの面接で，夏休み中のことを聴いたところ「生きているのが面倒くさくなって，もういつ死んでもいい」と考えていたそうである。以前から「人は死んだらどうなるのか」などと考えることがあったが，今はその悲しみを強く感じられるということだった。積極的に死にたいと思っているわけではないが，食べることにも眠ることにも興味を示さず，眠らない日が何日もあったということで，消極的ではあるが死への憧れを感じているように思われた。また，明日は進路検査があるので来たくないといっていたが，次の日から校門を入ることができなくなってしまった。

Clが全く登校できなくなったので，教育相談連絡会を開き，今後の対策を話し合い，Clの心を支えることが重要であることを共通理解した。その後，保護者に来校してもらい，Clの心理状態や消極的ではあるが死への憧憬を持っていることなどを説明した。そして，次の週からClと保護者は，専門の医療機関へ通院し始めた。また，医療機関との連絡は，その時々のClの病状や対応の仕方について，母親を通して受け取ることにした。

(2)　第2期（X年9月～X＋1年3月）

全く登校できなかったときから，相談室登校を経て教室で授業を受けられるようになるまでの時期（2年生後期）

9月の半ばの面接では，Clの状態は良くないように見え，こちらの尋ねることにもほとんど答えなかった。しばらくしてから，前回学校に来たときには，何故かわからないがどうしても校門から入ることができず，初めて母親に「行きたくない」と電話をしたと言った。そのことは「とても嫌なことで，行きたくないという感情だった」というので，それが分かってかえって良かったことを伝えた。その後死んでもいいと思っていたことを聞いたところ，「今はどうでもよい」と思っているそうである。それから，〈医者にいったそうだがどうだったか〉と聞いたところ，「心理検査で，時間が掛かったことについて医者に聴かれたけど答えられなかった」と言った。それは，二者択一の質問で，曖昧な答えがなかったため，自分には難しかったと言った。これらのことが言えないために医者は症状が重いと捉えたようで，母親から「登校することより，心の安定を優先してください」という医師からの伝言があった。

一方，Clは何か感じているのにそれを口にすることを躊躇するために，内的世界に閉じこもっていくように思われたので，これからは，自分の考えや感情を言葉で表すことを中心に面接していくことを話し合った。

10月の面接時，約束より1時間遅れて来室し，「他の生徒に会いたくなかったから遅くきた」と言った。だが，そう言いながらもClは元気そうであり，家では，普通に起きて生活し，

母親の経営する塾の採点バイトにも参加したということであった。また，他にギターも習っているそうで，閉じこもりにはなっていなかった。そして，考えに耽ることは，以前より少なくなったが，相変わらず自分の人生はどうでもよいと思っていた。〈留年はしたくないので登校したいと言うことだけど？〉と聞いたところ，Clは，「留年したくないが登校はできない」と言った。そこで，〈しばらく相談室に登校して，慣れて来たら少しずつ教室にも行ってみたらどうだろうか〉と提案してみた。「それならできるかも知れない」というので，母親に相談せず自分の考えで決定してから返事をくれるように言った。帰り際に，Clは時々母親と食事に行ったとき，「母親がトイレに立つとこのままおいて行かれるのではないかという不安に襲われる，自分は人間不信になっているのだろうか」と言った。これは，早期幼児期に母親の共感性や応答性が不備なものであったため，Clにしっかりとした心的構造が獲得できていないもの（Kohut，1978）と推測される。そのために，自己対象である母親が目の前からいなくなると心の安定を失うことになると思われる。

教育相談連絡会で，Clは留年したくないと思っているが，教室には入れないことを知らせた。そして，大勢の中の孤独には耐えられないが，一人の孤独なら大丈夫であると言っており，相談室登校なら可能なのでしばらくそのようにさせたいことを提案した。そこで，当面Clの負担とならないように足慣らし程度の登校にしてもらうことを教員間の共通理解として決定した。その後，母親が明後日から午後のみ登校したいとの返事が来たとき，医者に登校することが負担にならないかを相談して欲しいと伝えた。医者はClが登校しようと意欲を持つことはいいことであると言ったそうで，10月の半ばから午後のみ相談室に登校し始めた。

10月の終わりには，定期考査を保健室で受けた。だが，Clは以前のようにつらい表情を見せているので様子を聞いたところ，自分の感情が出ると登校への抵抗が出てくるため，朝から何も考えないようにしているそうであった。一方，欠課時間数が増え，単位不認定になりそうだが，まだ，教室に入ることはできないようであった。そのうえ，「誰からも話しかけて欲しくない」と言い，他者との接触を極度に嫌がっている様子から，対人恐怖の症状を表しているように思われた。

11月に入り，単位不認定になりそうなので，相談室から教室へ少しずつ授業を受けに行っている。面接には，前回と違い明るい表情で来室した。〈疲れていないか〉と聞いたところ「それほどでもない」と答えた。通院しているからか安定して穏やになってきた。今までのけだるさが少なくなり，「来週から毎日授業を受けようかと思っている」と言った。〈なるべく無理をしないように〉と伝えた。

11月半ばになり疲れたのか欠席が続いた。最近はどうかときいたら「疲れた」と言った。そこで〈登校することに決めたのは？〉と自分で答えなければならないような質問の仕方をしてみるが，やはり明確な答は返ってこない。だが，登校したくないという意志はしっかり

見せるようになった。概ね順調にいっているが，欠課時間数が多くなっているので，〈だめならだめでいいじゃない？〉と言ってみたら黙っていた。それ故に，〈やれるところまでやりましょうか〉と変えてみたら「そうします」という返事が返ってきたので，自己主張の姿勢が少しずつ表明されるようになってきたと思われる（面接時間も短縮した）。

12月の定期考査は，緊張すると腹痛になるからと保健室で受けた。その後少し距離を置き，Clが話すことを聴くという面接をした。すると，疲れていることや大きな荷物をもって転んだことなどを話した。そこで，〈よく頑張っているから大変だろうね〉〈大きな荷物を持って転んだのはさぞ痛かっただろうね〉と返した。このような返しかたで話を続けていったところ，中学時代の友人が訪ねてきて，いろいろと楽しんだことを語った。その後，夕方から日本史の補充課題に取り組み何時間もかかったと楽しそうに話してくれた。そのうえ，冬休みには友人が遊ぶ計画を立てて誘い出してくれるという。また家族でもディズニーランドに行くとも言っていた。これらのことを，ゆっくりであるが途切れなく話すことができた。その中で，これまでは，この友人を通して他者との関わりをしていたそうだ。だが，「今は，高校が違うため自分で他者と関わらなければならないが，どうしても自分から人に話しかけていけない」と言っていた。このことから，Clは他者に対して強い興味を示しながら，自分から関われないという自己愛傾向者の回避性を示しているように思われた。

同日に母親との面接で，最近の様子を聞いたところ，家では疲れたと何度も繰り返し，横になることが多いということであった。それは家だから言えることではないかと聞いたところ，「ええ，ええ，そうですね。そうだと思います」という言い方をするが，その話し方には共感性のなさを強く感じた。Clが感じている将来の不安についても，「1年くらいのことなら，家でぶらぶらしてもいいですが，後はなんとかなって欲しいですね」ということだった。つまり，母親は，大学へいくのは当然と思っているらしく，Clは母親の考えを察して，そうしなければならないと思っているようだった。そこで，〈後のことは心配しないでというくらいの気持ちでいて欲しい〉と伝えたが，母親は納得できていないことが感じ取られた。

3学期が始まり，登校への意欲がなくなりつつあった。そのうえ，総欠課時間数が100時間を超えるため，各教科から補充課題が一斉に出され，さらに負担に感じていた。だがClは課題をこなすことより，登校できるかということのほうを不安に思っていた。〈本当に細い糸でつながっているんだね〉といったら，「蜘蛛の糸ぐらい細いかもしれない」と冗談交じりで言った。不安な状況だからこそ冗談を言い不安感を抑えているように思われた。心の中は，いやで仕方がないのだから，それをしっかり受け止め，〈どうしても嫌なら休んでもいいよ〉と伝えた。

2月に入り更に辛い様子で来室した。疲れているのではないかと聞いたら，「だいぶん疲れていると思う」「でももう少しだから来なくてはと思っている」と言った。そこで，残りの出席すべき日数について，Clとカレンダーで確かめたところ数十日であったので少しほっとし

ていた。一方，課題が負担であることに触れたところ，負担であるが少しずつやっているということだった。それは，各教科担任が，Clに個人的な指導を施しているらしく，教師との関わりの中でやりこなせるということであった。最近，Clは，自分の心を話せるようになってきた。以前は「…だと思う」「…かも知れない」などと言い，明確な答え方はほとんどなかったが，今は明確化した自分の言葉で伝えてくる。このように少しずつではあるが，自分の感情に意識が向けられているように思われた。

3月の学校行事のときに，担任から補充課題を行うように言われ，相談室で勉強していた。本当は欠席したかったが，担任から強く言われ仕方なく登校した言うことであった。そこで，進級する気持ちについて聞いたところ，どうしてもしたいということなので，〈それならば終わらせなければならない〉と伝えた。Clは，課題が永久に終わらないかのように思い，しきりに心配していた。しかし，補充課題は，終わったものもあるため，それについて褒め，残りもできることをイメージさせて頑張らせることを指示してみた。Clには，父親が不在なので，父親的な強さで言われることに反発しながら，担任には親近感を持っており，頼りにしていた。

3月の終わりの面接では，進級できることが確定したので，うれしそうにしていた。今年度の一番辛かったのは，課題を終わらせることだったそうだが，〈自分にもできることを知ったと思うけど〉と聞いてみたところ，「そうかも知れない。でも来年度のことを考えると不安になる」と言った。そこで，〈途中でやめてもいいと言われたらどうした？〉と聞いたら，「多分最後まで登校したと思います」と言う答えであった。そこには母に言われたからでもなく，自分の意志で進級に向けて頑張ってきたことに気づいた様子が伺えた。改めてよく頑張ったことを褒め，来年度は週単位で登校することに目標を置きながらゆっくりやっていくことを約束した。

(3) 第3期（X＋1年4月～9月）

最終学年になり，不登校傾向を示しながらも，努力して卒業を迎えるまでの時期

新学年になり初めての面接には明るい顔で入ってきた。今は，英語の予習に苦労していると言い，「ついていけるかな。もう嫌になっているかも知れない」などと不安な表情であった。しかし，Clは一生懸命に勉強するので，長期に欠席しても成績不振にはならなかった。このように能力があることを実感させながら，少しずつ不安をなくすように面接していった。そして，体調が整わないときは曜日を変えて休むように勧めた。これについては何時間の欠課から補充が必要になるのかなどと熱心に聞いてきた。更に，クラスの男子が少なく友人ができないことにも不安があるらしく，「いいかな，だめだろうな」などと漏らしていた。このように不安な気持ちを出すことで不安解消をしているのか，最近の面接はこのような言葉で終始していたが帰りにはいつも元気になっていた。その後，風邪をひき休んだため，週末には母親が無理して登校させたらしく，4月の終わりには疲れた顔で来室した。最近の様子を聞

いたが，あまり話したがらないので，話題を変えて過去の習いごとについて聞いたところよく話し出した。各種塾には，小学校の1～2年生から行きだして週に8コマほど行っていたが，一日に2から3種類の塾に通うこともあったという。それは中学まで続き，嫌だと思ったら行けないので何も考えないようにして通っていたと言う。そのうえ，休みたいと母親に言うと，それならすぐやめるように言われたので，我慢していたそうである。高校へ入学したときも，2年生の夏休みまでは何も考えていなかったが，9月に入り，突然嫌だという気持ちが出てきたという。〈この気持ちを行動に表したのは初めてだったのか〉と聞くと，「そうだった」と確かめるように言った。だが，英語塾は休まず続けたし，ギターも習い始めている。学校に行きたくないときに，何故これらの塾には行けるのかと聞いたところ，「大勢の中の孤独には耐えられなかったし，人との関わりも嫌だったが，塾は人も少ないし，誰とも関わらなくてもよかったから」と言った。今もこの塾は続けているが楽しいと感じられるので，そこが以前と違うところだと言っていた。そして，Clは，この習い事のおかげで閉じこもりが避けられたし，再登校にも繋がったと考えられる。

5月の終わり，定期考査後の久しぶりの面接であったためか，約束の時間より早く来室した。試験の結果はどうかという質問に「危ないかもしれない」とにこにこしながら答えた。特に数学が心配というが，その様子はそれほど深刻ではなかった。ところが，「昨日も休んでしまった」と後悔するような言い方をして，欠席に対する罪悪感は強かった。そこで心の疲れをどのくらい感じているのか聞いてみた。去年よりずっと良い状態であると言ったが，登校したくない気持ちはあり，「日曜日と水曜日が一番辛い」という。そして，「卒業ができるか不安に思っている」としきりにいうので，〈あなたなら大丈夫よ〉と何度もいいながら，このような確認が必要なのであろうと思った。つまりClは，本日の面接でも勉強や欠席への不安，卒業への不安を言葉で表し，他者からの肯定的な言葉で，それを払拭させようとしているように思われた。

6月に入り，登校への不安はさらに増していった。そこで，登校したくない気持ちと，卒業したい気持ちについて考えてもらった。すると，ゆっくり考えてから，やはり卒業したいと言った。〈それには，どうしようか？〉と聞いてみたところ，「登校しなければ....」と言った。〈それならどうする？〉と言ってみたら，「休みながらでも登校する」との返事だったので，〈あなたなら大丈夫よ〉と再度承認した。そのあとに卒業後のことが考えられないと言うので，〈卒業が間近になったら考えていこうか〉と提案してみた。このことについて，母親はどう思っているのかと聞いたら，大学へ行かせたいらしく入学案内を見せてくると言った。しかし，Clは，そこまで勉強へのエネルギーがないと自分をしっかり理解できていた。また，「母親が高校までの歩くべき道を示してくれたが，大学から就職への道は提示できないと思う」と言い，自分ではどうしたらよいのか困惑しているようすであった。とくに，働くことに不安が強く，人と交わらなければならない仕事は自分には無理だと思っていた。つまり，

Clは回避性と対人恐怖を抱えており，他者と交わらなくてもよい仕事につきたいと考えていた。

前回の面接から2回のキャンセルが続いた。夏休み前だというのに，Clは以前の状態に戻りつつあり，こちらの問いかけに「かも知れない」などとはっきりしない答え方をした。それは，登校することを考えると眠れないらしく，明け方の3時から6時くらいまで起きており，眠くて仕方ないようであった。6月が乗り切れるかで不安状態になっているにもかかわらず無理をして登校したことと，定期考査があったので，各教科担任から遅くまで学習指導を受けていたことが重なり疲れてしまったのだ。Clは，欠課時間が増えると補充課題を課されることを強く嫌悪し，登校することにこだわったからであった。そのうえ，母親が夏休み中の受験用補習も受けるように申し込みをさせていたことも関係していると思われた。このように多くのことが登校を負担にさせている要因と思われたので，前夜から登校しなければと思わず，朝起きて行けそうなら行こうと考えたらどうか，補充課題もやってもいいという気持ちになったらどうかと提案してみた。Clもそれを受け入れて登校できたら来ることにすると言って帰っていった。

2学期に入り，少し元気になっていた。しかし学校祭が終わり，平常授業になったため疲れが出たのか，相変わらず登校不安を持っていた。また，卒業後のことを考え，「大学へは行った方がいいのかなと思い始めた」といい，補習授業を受けることにしたと言った。たぶんに母親のコントロールがあると思われたが，Clは「自分の考えで今年はだめでも受験をしたい」というので，黙って聴いた。また，最近クラスに話かけてくれる人ができたらしく，そのことをうれしそうに話していた。これはのちに，担任がクラスの男子に話しかけてくれるように頼んでいたということが分かった。Clは，明確には言葉で表さないが，無意識のうちに他者を動かしているところがあり，この担任が動かされたように，Thも何かしてやらなければと行動しかけたことが何度もあった。

10月に入り久しぶりの面接であったが，とても疲れているように見えた。「昨年ほどの登校不安はないけれど，惰性で登校している」といった。そこで，登校しなければならない日は，残り少ないことをカレンダーで示しながら，安心感と到達点を与えてみた。それによりClは，何とかやれそうだと感じたらしく頷いていた。また，以前のように眠れない日が多くなったようで朝まで起きていて登校するので，「体がとてもだるい」と言った。そして，ときには全く身体が動かなくなり，登校できないこともあると言った。これは深く考えすぎてではなく，次の日への緊張感や予習が追いつかなくて眠れないということなので精神的には安定していると思われた。一方，クラスで話しかけてくれる友人ができたが，その友人には親友がいた。その子がいないときにだけ話しかけてくれるのだとがっかりしていた。この友人は担任からの要請で面倒を見ていることを，Clは感じ取っているようであった。そこで，残りの日々も〈やれるだけやりましょう〉と励まして終わりとした。

先月の定期考査後から，とうとう登校できず10日以上の欠席が続いた。Clは，何もする気がないといい食事の時以外はずっと寝ていたそうである。これは定期考査前に各教科担任を廻って，自分から質問をしていたことで，疲れ切ってしまったのであろう。そして，張りつめていた緊張が切れたように登校できなくなったのである。今回の面接で，Clは「これから登校する自信がない」と言い「卒業もどちらでもいいかな」と言ったが，母親から「ここまで来て，卒業しないでどうするの」と言われ戸惑っていた。そこで，来週も欠席するように勧めてもはっきりしないので，〈欠課時間数が多い教科だけ出席するようにしたらどうかな〉と提案してみたら，「それならできるかも知れない」と承諾した。また，〈補充が増えても3月1日に卒業するのではなく，補充が終わったときに卒業と考えたらどうかな〉と提案してみた。すると「そんなこともできるのだ，それならできるような気がする」と登校に同意し，翌日から少しずつ登校し始めた。

12月の面接には，時間を早めて欲しいと自分から言いに来るなど積極的になってきた。その顔色は，明るく楽しそうであった。テストの成績をとても気にしていたが特別に悪くもなかったようだった。しかし，Clは「今回はいいけど，3学期は頑張らなければ心配です」と相変わらず不安がっていた。しかし，登校に関しては何とかやれそうだという自信がついたのか，3学期には早めに補充を始め，みんなと一緒に卒業したいと意欲に燃えていた。

その後の面接で，卒業後のことを尋ねたら，「お母さんが予備校に行った方がいいというから…」と嬉しくなさそうに話していた。そのことで話し合ったのかと聞いたら，母親が一人で考えているだけと言うことであった。ところが，Clはできたらのんびりしたいらしいが，これを母親に伝えることはできないのであった。〈いつも何か言いたいことがあっても言葉にせず我慢することが多いのでストレスがたまるのでは？〉と解釈したところ「言えば良かったと思うことが多い」と言っていた。「高校に入学してから話しかけてくれる人もなかったので，人と関われなかったが，3年生になり話しかけてくれる人ができたから，ここまで続けてこられたのではないかと思う」とも言っていた。最近は自己への理解ができるようになってきており，自分にできることとできないことを言葉で表せるようになってきたと思われる。

3学期になり定期考査や補充があったために，面接のキャンセルが続いた。Clは同級生と同じように3月1日に卒業したいと望み，日々勉強に励んでいた。そして，担任が課題提出の締め切り日を決めても，それをやりこなそうと努力し，強い決意で卒業を目標としていた。

2月半ば，補充が終わり卒業が決定したときの面接で，よく頑張ったことを褒め，〈ここまでやってきた自分についてどう思う〉と聞いたら「よく頑張ったと思う」と答えた。〈自分はできるという自信がついたんじゃない〉というと「そうかもしれない」と嬉しそうにしていた。そして，卒業後のことを聞いたところ，「今年は受験しないつもりだ」と言った。それは自分の学力に自信がないので，無理して受験することもないと母親と話し合ったそうである。そのかわり，4月から予備校に行くように言われ，自分に合うところを探していると言うこ

とであった。このことは医者にも相談したそうだが，「通うのなら毎日の方が身体が慣れていいだろうとアドバイスしてくれた」と言うことだった。

Cl は3年の間，不登校傾向を示しながらも努力して登校し，卒業を迎えようとしていた。そこで，教育相談として Th の仕事も終わりとしたい旨を伝え，Cl も承諾した。Cl と母親には，今後は医師と相談し，他の臨床心理士との面接を試みることを勧めた。そして，本日をもって継続面接は終了にして，卒業後は何かあったらいつでも相談に乗るということで終結とした。その後，卒業式の当日に，Cl が自分で作ったというクッキーを持ち挨拶に来てくれた。相変わらずもじもじしながらゆっくり話していたが，嬉しそうであった。現在は，元気に予備校に通っていると Cl から連絡があった。

Ⅲ 考　察

1．事例の特徴について

Cl の病態水準は，それほど重篤なものではなかったと思われる。しかし，幼児期に母親の情緒的応答性が不確実であったのか，自己鎮静能力に欠けている。そのうえ，呑み込み型の母親のもとで養育されているので，自他の区別が十分に分化されていない。それは，自己の感情や欲求が明確に自分自身のものとして理解されず，未発達なままであったことから伺える。それらは，母親からの分離不安の強さにも繋がっていた。そして，これらのことから，Cl は自己評価が低く自分に自信が持てないため，自己愛が傷つくことを恐れ，他者との関わりを避けていると推測される。その他者との関わりをするために，外でも母親の代理を必要とし，それを確保できなかった高校生活のなかで不適応を起こしたと思われる。それは面接当初に，Th や担任，その他の援助者が Cl を庇護し，世話をしなければならないという気持ちになったことでも理解される。つまり，Cl は，思春期に入り精神的発達課題に取り組むとき，心理的親離れができず，母親からの分離不安がさらに強くなり，精神的不安定になったのであろう。そして，Cl は幼児期の自己愛的で万能的な自己を持つがために，外的対象との関わりに適応できず，不登校に陥ったものと推測される。

2．教育相談における面接経過について

教育現場における面接は，教育的なかかわりと心理的なかかわりの両技法的な力量が求められる。そして，教育指導的なかかわりでも来談者の心を傷つけるようであってはならない。それ故に，来談者の自我機能を知り，それ自体を支持することを念頭におき，一貫して受け身的なかかわりに心がける必要がある。そこで，本事例との面接は，支持的アプローチを心理療法に導入して行った。

この面接の開始から，Cl の自我機能は，高校生男子の平均よりかなり低く，情緒的にも未発達なために，自分自身の感情を実感として持てないのではないかと思われた。そこで，面

接はCl自身の情緒的体験を中心に行っていった。このためか，第2期の「とても嫌なことで，行きたくない感情だった」という嫌なことへの感情を露わにできたと思われる。それにより不登校に陥ったとしても，Clにとっては感情を表出することの重要さを体験させることができたと理解される。

面接経過を振り返ると，来室当初から，Clは依存対象との未分化な同一化が見られ，自分自身のことであっても「…かもしれない。たぶん…だと思う。…とお母さんが言ってた。」などと，すべて人ごとのような態度であった。それらは，幼児期の万能感を満たしてくれる母親の態度により助長されていると思われた。そこで，母親の協力を得て，家でもCl自身の言葉で感情や欲求を述べるまで待つということをしてもらった。また，このClの依存欲求は母親のみでなく，周囲にいる他者にも向けられていると感じ取られたので，面接の中でも，Clの感情を言葉で表出させることを続けた。それは〈どんな風に感じたの？どう思った？どうするといいと思う？〉などの質問をしていった。このようにすることで，Clの感情を育てるとともに，母親からの分離を促し，自分自身で欲求を充足できるのではないかと考えた。その一方で，教員間の協力も得て，Clに対して学習指導という名目で多くの援助者に関わってもらい，他者との関わりを深めていった。その結果，母親という依存対象がなくても，学校内で適応し，登校に繋がっていったと思われる。

そして，Clが不登校に陥ったとき，医者からは「登校することより，心の安定を」と言われた。しかし，面接する中で「登校できないが，留年したくない」というClの気持ちに視点を置き，「できることをさせる」という教育的かかわりを行った。それが，〈しばらく相談室へ登校し，慣れたら教室にも少しずついこうか〉と行動させたことであり，実際に体験できることを提供するという教育指導的なものであった。これは学校が行うべきことの「教育の機会としての相談室登校」である。しかし，この相談室へ登校することによって，Clには心の負担が増し，辛い日々だったのかも知れない。それを表しているのは，登校するようになったというTh側の安心感から〈だめならだめでいいじゃない〉という言葉が出たときのことであった。これをClは，Thの本当の気持ちから出ている言葉ではないと感じ取り，返答を控えたのではないだろうか。その後の〈やれるだけやりましょう〉と言う言葉に頷いたというのも，相手の期待通りに振る舞おうという適応様式から行動しているのに，さらに重荷を背負わしたものと推測される。そのうえ，3学期の終わりに，補充課題をやりこなせないかも知れないという不安を訴えているにもかかわらず，進級したいという言葉をそのまま受け取り，〈終わらせなければならない〉と教育的視点から判断し指示した。これは学校社会に適応するために，Clが依存対象の代理をThや担任に求めていることが分かっていたので，あえて自律させることを考えたのであった。だが，本当に支持的アプローチならば，このときのClの課題が永久に終わらない不安を共感し支持すべきであったと思う。

第3期には，Clが自分の感情を実感できるようになったことで不安傾向はより強くなっ

た。そして，これを口にして他者からの承認を求めるようになった。それらの行動を見て，Th として，Cl の心を支えるという受け身的態度に徹していった。この Cl の心を受け止めるという支持的なアプローチになって以降，Cl の態度にも変化が表れてきた。それは自分の感情を言葉で表出できるようになり，行動も積極的になってきた。そのうえ，卒業への意欲が出てきたことも確かである。また，自分の感情を「…だと思う」などという，「まるで他人ごと」ではなく，自分自身の実感として体験できるようになっていった。最後には，母親との分離不安は残るが，自分を理解し将来についても一人で考えられるようになった。

3．教育相談における援助について

教育相談における面接の難しさは，Th が教育的機能と心理的機能を併せ持って行わなければならないことにある。それは面接の流れに応じて，両機能を使い分けて Cl を進級や卒業に向かわせる必要があるからだ。このように多面的な援助が期待される場合に，それらを一人で背負うことは Th 自身が混乱をきたし，Cl の心に負担を与えることになる。そのような場合には，援助者全員が，各々の役割を明確にして援助を行っていくことが重要と思われた。そこで，教育相談連絡会において，面接者，担任，他の教員，保護者が行うべき役割を取り決め，Cl との面接を取り巻く状況をお互いに共通理解し援助していくことをコンサルテーションした。その後，教育現場ではこの共通理解したことを元に，Cl への援助が行われ卒業させることができた。しかし，この事例のように，教育的側面からアプローチしていくと，進級や卒業に繋がっていくが，Cl 自身の抱える問題はほとんど解決されてはいないと予想される。なぜならば，登校させることが目的の教育的なかかわりのため，母親と同調しやすく，Cl を治療に向かわせることができないのも確かである。今回も，教育相談連絡会で共通理解したことを進めようとしていたのに，母親は不登校時や進路の選択において，Cl をコントロールしようとしていた。結果として，卒業はできたが，今後は治療としての心理面接を受けなければならないと思われる。このように教育相談における面接については，今後も検討しなければならない課題が多い。今回，事例を通して教育相談について検討することで，心理面接の役割について明らかになり，支持的アプローチの重要性についても認識できたと思われる。

IV．おわりに

本事例は，2年3ヶ月という短期間の面接であるが，Cl の自他が分化し，自分自身の情緒を実感できたと思われる。そして，Cl は学校から離れ，将来のことを主体的に考え始めている。事例の面接期間や経過としては十分とはいえないが，青年期前期の面接としての目標は，ほぼ達成されたと思われる。一方，この面接過程を検討することで得られた知見を，今後の教育相談での教育的かかわりと心理的なかかわりへの統合的援助を目指すために利用してい

きたいと考えている。

V．要　約

本稿は，学校の教育相談における不登校生徒との面接過程について報告するものである。教育相談は，教育的機能と心理的機能を併せ持っているが，この相談活動は治療をする場ではないと捉えられている。その中で心理面接の果たす役割について明確化し，今後の相談活動に役立たせることを研究の目的とした。そのために，面接の場に支持的アプローチを導入することの意義および，その認識について，面接者の立場から，事例を通して検討した。

教育相談の場での心理療法的なかかわりや教育指導的かかわりについて，教育現場では賛否両論の意見があったり，その援助には多くのことが期待されたりしている。このなかでの心理面接の果たす役割は不明確なものである。そこで心理面接に支持的アプローチを取り入れ，来談者の心の安定を保つことを大切にした。そして，面接者と他の援助者や保護者，医療機関との連携を進めながら，来談者の登校を促すことによって，不登校生徒を援助した。やがて，生徒は登校し卒業することができた。これは学校関係者と保護者，医療機関の連携がうまく遂行され，心理面接が，その役割を充分に果たせたといえる。この事例で心理面接の役割も明らかになり，事例への理解も進んだと思われる。

参　考　文　献

馬殿禮子　1998　教育センター相談係の立場から　氏原寛・村山正治編『今なぜスクールカウンセラーなのか』ミネルヴァ書房

Hudson, W. C. 1978　Persona and Defense Mechanisms, J. Analyt. Psychol., 25, 54-90.

Kathrin, A. 1987　The Abandoned Child Within on Losing and Regaining Self-Worth.（老松克博訳 2001『自己愛障害の臨床―見捨てられと自己疎外―』創元社）

Kohut, H & Wolf, E. S. 1978　The disorders of the self and their treatment: An outline. *International Journal of Psycho-Analysis*, 59, 413-425.

Stern, D. 1985　The Interpersonal World of the Infant, Basic Books.（小此木啓吾他訳　1989『乳児の対人世界』岩崎学術出版社）

渡辺貞雄　1985『生徒指導：学校だからこそやれる相談活動を』学事出版

White, M. T. & Weiner, B. W. 1896　The Theory and Practice of Self Psychology, Brunner/Mazel.

Winnicott, D. W. 1980　Maturational Processes and the Facilitating Environment, 6th ed., New York: International Universities Press.